

令和 5 年度 栄東中学校入学試験問題

A日程(1月10日) 〔国 語〕 (50 分)

受 験 番 号	
氏 名	

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、問題用紙の表紙を上にして、静かに待ちましょう。
2. 監督^{かんとく}の先生の指示があったら、問題用紙と解答用紙のどちらにも受験番号と氏名を必ず記入してください。
3. 問題用紙は、表紙を除いて全部で22ページあります。ページ数を確認しましょう。
4. 答えは、すべて解答用紙に記入してください。
5. 印刷のはっきりしないところなど、質問事項があったら、だまって手をあげて監督の先生に聞きましょう。
6. 試験中、気分が悪くなった場合には、監督の先生に申し出てください。
7. 試験が終わったら、問題用紙と解答用紙は別々にして、監督の先生の指示にしたがって提出してください。

【一】 次の——線部のカタカナをそれぞれ漢字に直しなさい。

- 1 サツコンの情勢をかんがみて海外旅行を取りやめる。
- 2 母と姉の考え方はニカヨうところがある。
- 3 めったにないシロモノだ。
- 4 ゲキテキな変化をとげる。
- 5 化合物のソセイを調べる。

【二】 次の（ 1 ）（ 10 ）に当てはめるのに最も適切な言葉をあとの語群から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、記号は一度ずつしか使いません。

- ・ 権力者に（ 1 ）ことなく、自分の信念を貫きたい。
- ・ 何気ない会話の中で（ 2 ）と事件の詳細を話してくれた。
- ・ さまざまな趣味を（ 3 ）ことで心が豊かになれる。
- ・ 優勝候補のチーム同士が（ 4 ）ことで全体のレベルが上がる。
- ・ つかれているせいか机に向かったまま（ 5 ）ことが多い。
- ・ 多くの偉人のように自分の使命を（ 6 ）人になりたい。
- ・ やるべきことを（ 7 ）ようでは目標は達成できない。
- ・ 逮捕された犯人が（ 8 ）ようすもなく連行されていた。
- ・ 自分本位の価値観が（ 9 ）と住みにくい世の中になる。
- ・ 努力もせずに簡単に勝てると（ 10 ）弟をしかる。

【語群】

- | | | | | |
|--------|---------|--------|---------|----------|
| ア まどろむ | イ せめぎあう | ウ はびこる | エ 水を向ける | オ まつとうする |
| カ おもねる | キ 悪びれる | ク うそぶく | ケ おこたる | コ たしなむ |

【三】 次の文章を読んであとの問いに答えなさい。字数指定のある問いは、句読点などの記号も全て字数にふくみます。

筆者のモチベーション論の研究において、頻繁に依拠する理論がある。エドワード・デシらによる「自己決定理論」である。

人のやる気は内側から湧き起こってくるものなのか、それとも外から与えられるものなのか。デシらはこの視点から研究を続け、^{*2}内的報酬↓内発的モチベーション、^{*1}外的報酬↓外発的モチベーション、というように、やる気の源を2つの心理的な報酬体系に整理した。やや概念的すぎるくらいはあるが、直感的にとってもわかりやすい。

デシらはまた、内発的モチベーションが発揮される要因は、自律性、有能感、関係性の3つにあると結論づけ、中でも自律性が中心的であると主張するに至っている。

詳細は割愛するが、知れば知るほど説得的なデシの理論。しかし、筆者には1つだけ引くかかるところがある。デシが「人は皆自律的でありたい」ことを前提にしている点だ。

人は、実はあまり自分では決めたくないのではないか？ こう感じることは日常的にたくさんある。特に他人に何らかの影響を与える場合だ。日本人は、今日の晩ご飯どうする？ 週末はどうしようか？ といったごく簡単なことですら、自分の考えを伝えることを回避する傾向が強くなっている。筆者が知る限り、特に現在の若者においてその傾向は顕著になっている。

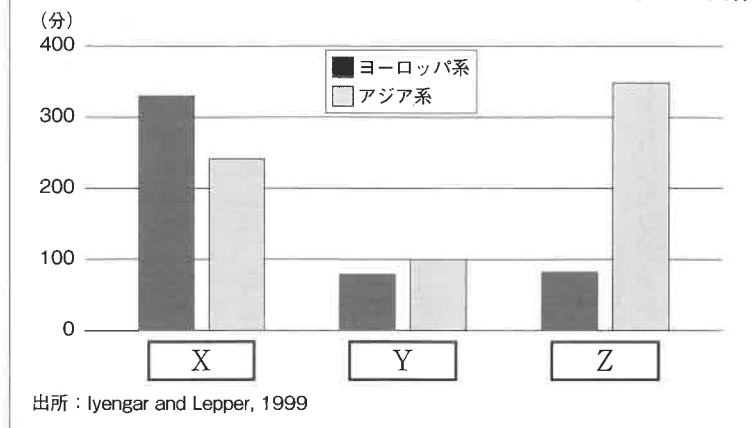
ここではさらに、その裏付けとなるデータを紹介しよう。

引用するのは、自己決定回避の論説が特に興味深いシーナ・アイエンガーの『The art of choosing（櫻井祐子訳『選択の科学——コロンビア大学ビジネススクール特別講義』文藝春秋、2010年）だ。

アイエンガーらは、サンフランシスコの小学校に通う7歳から9歳のアジア系とヨーロッパ系の子どもを対象とした実験を行った。複雑な実験を簡略化して解説するので、少々我慢してお付き合いいただきたい。

まず、子どもたちは、ランダムに並べられた文字を並べかえて単語を作るゲームに挑戦した。その際アイエンガーらは、子どもたちを3つのグループに分けている。第1に、やりたい問題を自分で選択するグループ。第2に、アイエンガーら実験者が問題を選択するグループ。最後は、問題はそれぞれの子どもたちの母親が選んだと子どもたちに伝えたグループだ。

図表 3-1 課題選択者の認知と内発的モチベーションの強さの関係



実際には、第2と第3のグループで選択された問題は、第1グループで選ばれた問題と同じものを使う。これで全グループとも、まったく同じ問題に挑戦したことになる。異なるのは、子どもたちが「誰が問題を選択したか」に対する認知のみとなる。

実験の結果、どのグループの子どもたちも同じくらい高い正答率を示した。しかし、本当の実験はここからだ。アイエンガーらは、ゲーム終了後もあえて子どもたちが問題に挑戦できる環境を残しておき、休憩時間に突入する。その上で、外からそっと、子どもたちがさらにどのくらいの時間を問題の解答に費やしたかを計測した。

手の込んだ実験だが、こうすることで、³純粋に子どもたちの問題に対する内発的モチベーションの強さを「自由時間の使い方」という代理変数をもって可視化できる。繰り返すが、異なるのは「誰が決めたか」という子どもたちの認知のみだ。

⁴その結果を図表3-1に示す。

ヨーロッパ系の子どもたちは、自分で問題を選択したグループが最も長い時間、問題に挑戦し続けた。実験者が選択したと伝えたグループ、および母親が選択したと伝えたグループは、ともに同じ程度となった。

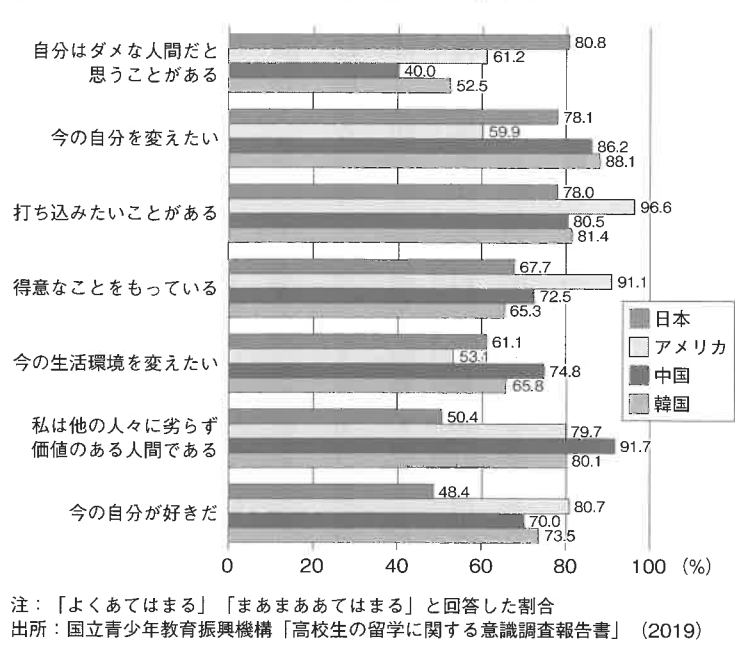
問題に従事した。次に自分で選択したグループ、最後に実験者が選択したグループとなった。

拝啓、デシ先生。内発的モチベーションにおける **A** 最強説が揺らいでおります。

なぜ日本を含むアジア圏では、「母親が決めた」と認知すること」が大きな意欲につながるのか？ 筆者を含め科学的に筋の通った論理を導くことはできていない。

アイエンガーは、自分や他人に不利益な結果を与えられたとき、人は自ら選択したことを後悔したり、選択そのものを避けたりするような心理作用が働くと主張している。何かを選択すること、何らかの不利益が発生する可能性があると考えているなら、自分

図表 3-2 高校生の自己肯定感に関する調査結果



からは決めたくない、誰かに決めてもらったほうが楽だ、という心理が作用する。文化的に、アジア圏のほうが、この感情が強いのかもれない。

この心理は子どもだけではなく、大人になっても作用する。大学生なら就職先の選択が典型的だ。自分で決めようという学生は本当に多い。

しかし、就職のような人生の岐路ならまだしも、今本書が対象としているのは日常生活における選択も含んでいる。いい子症候群の若者は「今日はお昼食べよう」とさえ言えない。友だちにすら。言えなかったら、それがルーチンな場合だけ(ルーチンなので自分の提案ではない)。

かつて小学校や中学校の教諭たちと、この点について議論したことがある。最も多く出た理由は、自信がないからではないかというものだった。

B

確かにデータで見る限り、日本の子どもたちには自信のなさが顕著

に表れている(図表3-2)。他国と比べた特徴として、仕方ないかもしれない。

自信がなく、臆病。これは第7章のテーマとしているので、ぜひご記憶いただきたい。

次に、「例題にならう」決め方に話を移そう。

これに関しては、彼らの間には強力な「行動の三原則」がある。

① 提示された例題はものすごく参考にする

② 例題の提示がなければ基本、何もできない（しない）

③ よって、参考とすべき例題の提示を強く望む

こんなエピソードがある。

ある職場で、上司が新人社員にひととおりのやり方を教えた上で、「わからなくなったらいつでも聞いて」と言い残し、ある業務を任せた。もちろん、ちょっと教えただけですべてサラサラとできる業務ではない（仕事とはそんな楽なものじゃない）。

しかし、彼らは一向に質問に現れない。

さて、それはなぜでしょう？

その上司の顔が怖いから？

確かにそれもあるかもしれない。

ならばエピソードの設定変更。その上司は福山雅治のようにカッコよく、大泉洋のように気さくでもおもしろい人だでしょう。

さあこれで質問に来るか。

と思いきや、依然として質問には現れない。

なぜか？

答えは簡単だ。というか、もうあなたはその答えを知っている。答えは行動の三原則の①と②にある。

彼らは、質問の仕方に関する例題を示してもらってない。

残念ながら多くの上司は、この答えに辿り着かないまま、任せた業務のデッドラインが近づく。しびれを切らして席を立ち、次のどちらかを演じることになる。

「なぜすぐに質問に来ないんだい？ 貴重な時間を無駄にしてはいけないよ」（福山雅治風）

「君たちはできなくて当たり前なんだから、どんなことでも聞きたいんだよ」（大泉洋風）

せっかく主演級の演技を繰り出したところに申し訳ないが、いい子症候群のリアクションは、次のうちのどちらかになる。

・次からあらゆることを聞きに来る（だってそう指示されたから）

または、

・やっぱり何も聞きに来ない（だって C を授かってないから）

あなたは思わず声を荒らげ本音をぶつける。「もっと自分の頭で考えろ！」

……大変申し上げにくいのだが、そのお叱りはほとんど無意味だ。

D

（金間大介 『先生、どうか皆の前ではめないで下さい』より）

*1 依拠……よりどころとすること。

*2 報酬……働きに対する見返り。

*3 割愛……おしみながら省くこと。

*4 ルーチン……きまりきった手順。

*5 福山雅治……日本の俳優。

*6 大泉洋……日本の俳優。

*7 デッドライン……期限。

問一——線部1「筆者には1つだけ引かかることがある。デシが『人は皆自律的でありたい』ことを前提にしている点だ」とありますが、筆者がこのように述べる理由として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 世界的にみて若者が責任を回避する傾向が強くなり、とても自律的とは言えないから。
イ 筆者の周囲を見る限り、日本人は自分の考えを伝えないようにしていると感じるから。
ウ 筆者自身のことを考えると、実は自分で決めたくないと思うことが日常的に多いから。
エ 多くのモチベーション論研究者は、デシ自身が自律的ではないことを知っているから。
オ 内発的モチベーションが発揮される要因のうち、関係性が最重要だと考えているから。

問二——線部2「第1グループで選ばれた問題と同じものを使う」とありますが、このようにするのはなぜですか。その理由として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 選ぶ人によって問題が違^{ちが}うと難易度の差が出てしまうため、グループ同士の正答率を比べることができなくなるから。
イ この実験では実際に誰が問題を選んだかということは重要ではなく、全員の正答率を同程度にすることが重要だから。
ウ 実際に誰が問題を選んだかが実験の要であるため、あらかじめ選ぶ問題の難易度をそろえておく必要があったから。
エ 子どもたちのモチベーションと問題選択者の関連をみる実験であるため、難易度の差が出ないようにしたかったから。
オ どのグループにも実験者が効果的な問題のみを選ぶことで、子どもたちのモチベーションを正確に測りたかったから。

問三——線部3「純粹に子どもたちの問題に対する内発的モチベーションの強さを『自由時間の使い方』という代理変数をもって可視化できる」とありますが、この内容の説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 最初の実験で正答率が高かったのは子どもたちが自律的に取り組んだためなのか、あるいは大人が強制的に問題に取り組ませた結果だったのか、子どもたちの自由時間の過ごし方ではっきり見えてくるということ。
イ 最初の実験では「誰が決めたか」ということは正答率に影響しなかったが、自由時間に子どもたちが問題に取り組むときには、誰が子どもたちの代理として問題を決めたかによって正答率に明確な差が出るということ。
ウ 最初の実験ではどの子どももモチベーションに差がなかったが、誰が選択したかという認識^{にんしき}を持っている子どもたちと持っていない子どもたちの間で、自由時間に問題に取り組む姿勢に明確な差が表れるということ。
エ 子どもたちの純粹なモチベーションは大人でも容易に見分けることはできないが、この実験のように自由時間を設けてそれぞれが好きなことに取り組ませれば、子どもたち自身が自らの内面を見られるということ。
オ 子どもたちが問題に自ら取り組もうとする意欲は内面的なものでなかなか分かりづらいが、自由時間での問題への取り組み方を観察することによって、その内面にある意欲を測定することができるということ。

問四 — 線部4「その結果を図表3-1に示す」とありますが、この図表の X・Y・Z に入れるのに最も適切な言葉の組み合わせを次から選び、記号で答えなさい。

ア	X	母親選択群	Y	実験者選択群	Z	自己選択群
イ	X	母親選択群	Y	自己選択群	Z	実験者選択群
ウ	X	自己選択群	Y	実験者選択群	Z	母親選択群
エ	X	自己選択群	Y	母親選択群	Z	実験者選択群
オ	X	実験者選択群	Y	母親選択群	Z	自己選択群
カ	X	実験者選択群	Y	自己選択群	Z	母親選択群

問五 本文中の A に入れるのに最も適切な言葉を、本文中から三字でぬき出して答えなさい。

問六 本文中の B に述べられている内容を推測し、その内容と関係の深い項目を、図表3-2の調査結果から三つ選び、五十音順に記号で答えなさい。

- ア 自分はダメな人間だと思うことがある
- イ 今の自分を変えたい
- ウ 打ち込みたいことがある
- エ 得意なことをもっている
- オ 今の生活環境を変えたい
- カ 私は他の人々に劣らず価値のある人間である
- キ 今の自分が好きだ

問七 本文中の C に入れるのに最も適切な言葉を、本文中から十一字でぬき出して答えなさい。

問八 本文中の D には「あなたは」で始まる最後の一文が入ります。本文をよく読んで、「あなたは」に続く部分を二十五字以内で答えなさい。

【四】次の文章は、柊サナカ『天国からの宅配便』の一節です。ある日高校二年生の「文香」のもとに、祖母の遺品だという荷物が「糸谷健一郎」から送られてきました。本文はその続きの部分です。これを読んで、あとの問いに答えなさい。字数指定のある問いは、句読点などの記号も全て字数にふくみます。

この糸谷とは、いったい何者なのだろう。祖母とはどういう関係なのだろう。遺品を預かるということは、かなりの深い仲なのは間違いでない。

もしかして、この糸谷は祖母の昔の恋人で……村と東京で密かに繋がりがあって……愛し合うふたりは引き裂かれ……いやいや、岩みたいに頑固で気の強いうちの祖母に限って、そんな秘められた恋愛は無かったはず。県外へのやりとりは、手紙か電話のみとなるだろうし、そういう色っぽいやりとりなんて、祖母からは最も遠い気がする。

文香にはわからないことばかりだった。

「よければ、お荷物を開けてみてください。中のものに関しても、説明いたします」

七星の言葉に促され、文香は恐る恐る箱を開けてみる。

何これ。

中には、ポータブルゲーム機が入っていた。状態からして、新品のようだ。マイクとイヤホンが一体となった、ヘッドセットも入っている。ポケットW i F iの機械らしきものもある。

ゲーム機？

「あの、いったい、これは……」¹途方に暮れる。

祖母はテレビさえ「くだらね」と毛嫌いしており、祖母とゲームと、東京に住んでいるらしき男性の糸谷が、どうしても結びつかない。いったい何なのだろう、これは。

「今日、住井さんが家にお帰りになったら、このゲーム機には、あらかじめIDとパスワードがセットされておりますので、このヘッドセットをつけて、ゲーム機を起動してください。そうすれば、すべてが明らかになるそうです。遺品自体の受け渡しも、ゲーム

内で行われます」

ゲーム内で、遺品を受け渡す？ いったい何が、どうなっているのか。

「え。では、このゲーム機はどうすれば。見るからに新品みたいですよ」

「このためにご依頼人が準備したものですから、ご自由にお使いください。ポケットW i F iだけはレンタルなので、使い終わったらご返送を。返送用の伝票はここにあります。費用はかかりませんので、ご安心ください」と、説明される。

何が何だかわからない。

祖母は電化製品全般を毛嫌いしており、洗濯機を使う母に、ずっと嫌みを言っていた。電気炊飯釜の導入さえ、メシが不味くなるからと許さなかった。いまだに我が家の掃除は、帚とちり取りと雑巾だ。特に祖母はゲーム機が嫌いで、どんなに文香が欲しがろうとも、家では禁止だった。

「わたし、ゲームって、やったことないんです」

「操作は、そう難しいものではないので大丈夫です」

もしわからないことや、困ったことがあればこちらにと、²天国宅配便の連絡先をもらった。七星はヘルメットをかぶり、「それは、失礼します！」とエンジン音を響かせながら去って行ってしまった。

今の、何だったのだろう。

手元の謎のゲーム機、見知らぬ男、祖母からの遺品。

夢の中で、脈絡もなく展開するストーリーみたいなのに、すべてが繋がっていないように思える。

この糸谷とは誰なのか。²祖母がこんなサービスまで使って、ゲーム内で孫の自分に送りたいものとは、何なのか。

とりあえず、すべては帰って、ゲームを起動してからだと、文香は力を込めて自転車をこぎ始める。

家に帰ると、自分の部屋にこもった。

どんな話が出てきても、驚かずにいようと、気持ちの整理をしようとするが、うまくいかない。祖母と同年くらいのおじいさん

にしては、選んだのがこのゲーム機というのが、いまひとつわからない。戦後の苦しい時期を、ともに過ごした祖母のかつての恋人が、運命に引き裂かれて地方と東京に。そしていきなりゲームを？ 孫に？ 送りつけてくる？

まあ、いくら想像していてもわからないので、文香は「よしっ」と気合いを入れつつ、ポケットW i f iと、そのゲーム機とやらを起動してみる。入っているゲームは、なんてことはない。文香もよく知っている、オセロのようだった。

ヘッドセットを差し込むと、ヘッドフォンから軽快な音が流れ出した。自分が考えているよりももっと、音質が良くて驚く。

なんだこれは、このオセロをどうすればいいんだ。とりあえず始まりそうなボタンを押してみた。緑地に基盤の目、白と黒の石の、おなじみの盤面が広がる。

隅っこのところに、「k e n 1」とあるが、これが名前なのだろうか。自己紹介欄のようなところには、「オセロ大好きk e n 1です！ よろしく」とある。

音楽が急に速いものになった。対戦モードのようだ。すると。

「八重っちじゃないよね？ まさかねー、じゃあ孫の文香さん？ あってる？」

陽気な声が出た。八重は祖母の名だ。でも、八重っち？ 祖母と繋がりがあって、てっきり祖母と同じ歳くらいのおじいさんを想像していたが、この声、ひどく若い。そして軽い。

そうか、糸谷健一郎で、k e n 1なのか、と今わかった。

何か答えなきゃ、と思って、文香は焦る。

「もしもし？ ええと、これ、声、繋がってるんですね。聞こえますか。もしもし？ 住井文香です。住井八重の孫です、よ、よろしくお願いします」

「聞こえてるよー、じゃ、お孫さんのよしみで、白でお願いしゅす。俺は黒ね。後攻が有利だから、とりあえず俺から行きます、よっ、と」と言いつつ、k e n 1は黒を置いた。なぜかオンラインで、いきなりオセロの対戦が始まっている。

何なんだろう、と思いつつ、とりあえず、文香も白を打った。一個だけ、黒をひっくり返してみる。

「あの、あのすみません。k e n 1さん？ 祖母とはどういう……」

「八重っちは、俺のオセロ仲間ですー、毎日つるんで、すげえ楽しかったんだー」と言う。

話を総合するに、どうやら祖母はボケ防止にと、誰かから与えられたらしきオンラインのオセロゲームで、この軽そうな男、k e n 1と毎日のようにやりとりをしていたらしい。病室にはそんなものの影も形も無かったので、誰かが見舞いに来たときには、隠していたのかもしれない。

それにしても、このk e n 1、しゃべり方がテレビの番組で見たホスト、もしくはギャル男そのもので、文香は、東京はいろいろすごいな……首都だな……と遠い目になる。こんな風に、いろいろべらべら立て続けにしゃべられたら、うまく会話できるか自信がない。よく祖母はこの男とやりとりできたものだ。k e n 1の姿をイメージしてみるが、どうやら声の調子から、寝ころんだままゲームをしているらしい。飲み屋とかで遅くまで飲み歩いて、昼頃起き出して寢床でそのままゲーム、無職でぶらぶら親のすねをかじっているような姿が思い浮かぶ。

見れば、右隅にはk e n 1、左隅には八重とある。本当に、祖母はまめにこのオセロをプレイしていたらしい。何の印なのか、大ささの違う星印もいくつか見える。

「八重っち、うちには孫がひとりいて、っていう話をよくしてさ。その孫ってのが俺と歳も近いから、盛り上がっちゃって。孫は東京に出たいて言うけど、そんなの絶対許さないんだって話をしてー」

何が絶対許さないんだ。

祖母の八重は、見知らぬ他人にもそんな話をしていたのかと、文香は怒りに震える。勝手に雑談のネタにされていたことも許せないが、文香にとっては人生の一大事でも、祖母にとっては、見も知らぬ人と、ゲームの合間に話せる程度の、そんなに軽い話題だったのかと。

オセロの白が、一気に黒に返される。k e n 1、なかなか強い。

「でね、俺、言ったんだ。女に学がいらなんて、もう古い古いつて。八重っち大正生まれなの？ って訊いたら、まだそんな歳じゃないって怒る怒る」

このギャル男、声だけだからって、怖いものなしだな……文香は思った。

「だってさ、生きていく力は、男だろうが女だろうが、絶対要るだろって、オセロしながら毎日大激論よ。したらさ、八重っちが、東京なんて出て行ったら、帰ってこなくなつて家も継がない、ひとり娘なのに、そんなことが許されていいはずがない、とか言い出すからさ。俺、なんだあ、八重っちの家って、そんなに名家で、重要文化財とかに住んでんの？ 家、石油出るとか？ って訊いたら、ただの田舎の家だって。俺、悪いんだけど、すげえ笑って、継ぐ……家も……普通の……家なのに……」継がせるとか……つて言つて、ヒイヒイ笑つたら、カンカンになつて怒るのな」

5 そのときの祖母の顔を見てやりたかった。そうなのだ、特に我が家は名家というわけではない。伝えられた財宝もなければ、殿様の血を引く家系とかでもない。ごく普通の家だ。

また黒がひとつ置かれて、オセロは進む。

「で、八重っち自身は、家継いで人生満足してたの？ って訊いたんだ。八重っちが、そりゃそうだって、声が小さくなるからさ、ええー、声小さくない？ って突っ込んだら、みんながそうだったんだからそうなんだ、って声を張るんだよね。でも、みんなと同じだからそれでいいんだって、なんかちよつとなー、つて言つたら、黙っちゃって。八重っちは、やりたいこととか、本当はなかったの？ って訊いたの。そしたらさ」

オセロは劣勢だった。頭の中が、よくまとまらない。

「——映画も好きなきときに見たかった、もつと旅行もしたかったって、八重っち、やりたいこと、ボロボロ出てくんだよ」オセロの指が止まる。

旅行なんてくだらね。映画なんてくだらね、と吐き捨てるように言っていた祖母の声が不意に蘇る。

「じゃあさあ、お孫さんもそうじゃない？ って、俺言つた」

文香はそのまま、ゲーム画面を前に、動けずにいた。

「俺さー、俺だってこんなに身体が悪くなかったら、映画も好きなきときに見たかったし、旅行もしたかったよ。八重っち、俺とお揃いじゃん、つて言つたら、八重っちオセロしながら、声出して泣いてんのよ。でもオセロは強いんだ、八重っち」

ken1は笑っている。

「俺、ひとり暮らしもしてみたかったし、大学も行ったかった。車でドライブとかもしてみたかった。この身体だから、俺にはもう無理だけど、お孫さんは、八重っちと、俺の分まで、やりたいこと、今からいつばいできるんじゃないのって……ほらほら、手、止まつてるよー」

慌てて、白い石を打つ。

さつき「八重っちと、俺の分まで」とken1は言つた。

ただの怪我などで入院している人が、そんな言い方をするだろうか。

たぶん違う。声が明るいから最初、気がつかなかった。飲んだくれて寢床でゲームしているわけじゃない。ゲームで繋がった声の主は、相当深刻な状態なのかもしれない。オセロは操作が易しいから、それで——。

「八重っちが、孫はもう、見舞いにも来ないつて言うからさ、そっかー、つて思ってたけど、俺、八重っちのために、なんかやりたくなつて思った。八重っちは、天国宅配便とか、そんなの知らなかったみたいだけど、俺、前に調べたことあってさ。オセロ仲間のよしみだし、もし孫に、伝えたいことがあったら俺が絶対伝えるからって、代理で申し込んだんだ。八重っちの声、録ってるから。じゃ、行きまーす。いい？ OK？」

——文香——

確かに祖母の声だ。厳格だったあの頃より、ずっと弱々しい。

——もつと文香の話を聞けば良かった——

——やりたいことをやりなさい——

——行きたいところへ行きなさい——

——やってみろ——

いつもの祖母の声がする。いつだって、お前なんかにできるものか。やれるものならやってみろと見下され、馬鹿にされてきた。⁷でも今は違う。

——住井の血を、お前の力をみせてやれ——

オセロはもう、負けていた。

何度も札を言う文香に、ken1は笑って言う。「いいよーいいよー礼なんて。八重っちと対戦できなくなって退屈してたんだ。八重っちのこと伝えられて、俺もすつきりした！。なんだい、ばあちゃんは超強いのに孫は弱いじゃん。八重っちは、ああ見えてオセロの女王だから。ほら、名前の下の、横のそこ見て。大きい星が百勝だからね」

見れば、八重の名の下は大きい星ふたつに小さい星がたくさん。ken1のところには星はたったの四つだ。

「じゃあな、八重っちの孫ちゃん！ 達者で暮らせー」

本当にありがとうございます、と言って、他に何を言おうか、頭の中で考えているうちに、ken1との対戦は終わっていた。

不意に思い出す。小学生の頃、オセロの盤面を出して、縁側で白と黒、一人二役で遊んでいたら、一回だけ、「やってみろ」と祖母が相手をしてくれたことがあった。怒られるのが怖くて、終始ビクビクしており、何かの修行みたいだった。あのとき、祖母には大差をつけて勝ったけれど、怖くて、どう喜んだら良いのかもわからなかった。

今思えば、わざと負けてくれたのだろう。不器用で、孫との遊び方を良く知らなくて、うまく遊べなかったのかもしれない。

今こそ家は祖母と父母、文香の四人だけとなっていたが、昔は曾祖父、曾祖母、祖母と祖父、父を筆頭に五人兄妹がいた。農作業の他に子育て、掃除洗濯などの家事、三食の食事の世話を一手に引き受けて、祖母ひとりで家をまわっていたのだ。曾祖父は身体をずっと悪くしていて、その介護もやっていた。便利になった今とは違って、掃除機や食洗器、洗濯機などもまだなかっただろうし、農作業だってすべて手作業だったろう。一日のうち、自由になる時間なんて、ほとんどなかったに違いない。

オセロだってそんなに強かったのだったら、先を読む力みたいなもの、かなりあったはずだ。地頭も決して悪くはなくて、もしも時代が違ったり、住むところが違ったら、どんな人生が拓けていたかはわからない。

近所の寄り合いにしても、祖母なりに、地域の人と仲良く協力しあうことで、自分だけじゃなくて、家族や地域をも守ろうとして

いたのかもしれない。

もしかして、祖母は、入院したことで初めて、自分のための時間を持つことができたのだったら——

なんてことを言ってしまったんだろう、と文香は思う。祖母とまともに交わした最後の会話は、「ばあちゃんなんて、家が大事、家が大事って、この村からも全然出てないくらい、狭っつい人生じゃないか！ 世界のことなんか何にもわかんなくせに！」だった。わかっていなかったのは自分のほうだ。⁸狭っついのは自分のほうだった。

いつかの授業で習った宣言のように、人は生まれながらにして自由かつ権利において平等である。

——とは、限らないかもしれないけど、めまぐるしく変わっていく環境の中で、何が正しいのかも刻々と変わっていく中で、祖母は祖母で、ばあちゃんなりの人生を精一杯生きた。

——やりたいことをやりなさい——

——行きたいところへ行きなさい——

⁹「ばあちゃん……」

文香はつぶやいた。

（「オセロの女王」 柊サナカ 『天国からの宅配便』より）

- * 1 七星……………宅配便の配達員をしている女性。
- * 2 ポケットWi-Fi……………小型で持ち運び可能な通信端末。
- * 3 天国宅配便……………生前の依頼によって届けたい相手に遺品を届ける宅配便業者。
- * 4 ホスト……………主に女性客を対象とした酒類を提供する店で接客を行う男性従業員のこと。
- * 5 ギャル男……………ここでは軽薄な印象を与える男性のこと。

問一——線部1「途方に暮れる」とありますが、ここでの文香の様子を説明したものとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 電化製品を嫌っている祖母の遺品がゲーム機であるはずがないので、送り主がうそをついていると疑っている。
イ ゲーム内で遺品を受け渡すなど普通では考えられないので、送り主と祖母の関係が分からずに戸惑っている。
ウ 送り主や荷物の中身から七星が配達先を間違えたことは明らかなので、どう伝えるべきか言葉に迷っている。
エ 心当たりのない相手から祖母の遺品としてゲーム機が送られてきたので、状況をうまく理解できないでいる。
オ 新品のゲーム機などの高価なものが祖母の遺品と偽って送られてきたので、不安を隠すことができないでいる。

問二——線部2「この糸谷とは誰なのか」とありますが、「糸谷」という人物の説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 直接面識はないがオセロで毎日対戦していた祖母の年の離れた友人。
イ 定職につこうとせずにだらけた生活を送っている祖母のオセロ仲間。
ウ 入院した祖母にオセロゲームを送って共に遊んでいた祖母の恋人の孫。
エ 見舞いに来ない家族の代わりに遺品を預かっていた祖母の代理人。
オ オンラインゲームを通じて密かに交流を続けていた祖母のかつての恋人。

問三——線部3「よしみ」のここでの意味として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 約束 イ 縁故 ウ 合意 エ 関連 オ 名目

問四——線部4「文香にとっては人生の一大事」とありますが、具体的に何をするのが「一大事」のですか。十五字以内で説明しなさい。

問五——線部5「そのときの祖母の顔を見てやりたかった」とありますが、文香がこのように思ったのはなぜですか。その理由として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 普段の祖母は頑固で他人の意見を聞き入れようとしなかったのに、入院中にken1の話を受け止めて態度を改めたことが意外だったから。
イ 古い考えにしばられた祖母をいつか見返してやろうと思っていたが、ken1に先を越されていたことを知って悔しさを抑えられなかったから。
ウ 家を継ぐという考えはもう古いと孫に助言されていたのに、家族でないken1にも同じ主張をして反論された祖母をいい気味だと思ったから。
エ 名家でもない家など大事にする必要がないと誰も祖母に伝えていなかったのに、ken1が事実を告げたときの祖母の反応に興味があったから。
オ かたくなに人の話を聞き入れない祖母に対して普段から不満を抱いていたので、ken1が物おじせず祖母をやり込めたことが痛快だったから。

問六 ―線部6「ゲーム画面を前に、動けずにいた」とありますが、このときの文香の心境を説明したものと最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 厳格な祖母は家族に弱い一面など見せたことがないのに、ただのオセロ仲間であるken1の前では涙を流したことにショックを受け、自分は祖母にとって信頼できる存在ではなかったのだとむなしさを感じている。

イ 祖母自身もやりたいことができず人生に満足していないにもかかわらず、家を継がせることにこだわって文香の将来を決めようとしていたと知り、なぜ自分を同じ目に遭わせようとするのかと強い憤りを覚えている。

ウ 祖母は家を守ること以外には興味がなく、自分を家にしぼりつけようとしているのだと思っていたが、ken1から聞かされた祖母の言葉に、今まで否定的な言葉に隠されてきた祖母の思わぬ本心を知り動揺している。

エ 家族のために必死に生きてきた祖母の人生への嘆きに共感し、これまで祖母は旅行や映画に行く時間をつくることができなかったのだと思いつて、家事を手伝いもせず反抗していた過去をふりかえり後悔している。

オ 始めはken1と祖母の交流を楽しく聞いていたものの、ken1の目的が祖母への反抗的な態度を遠まわしに批判することだと悟り、家族の事情を知らない他人が口をはさんでくることに対し拒否感を抱いている。

問七 ―線部7「でも今は違う」とありますが、かつての祖母の言葉とはどう違うのですか。「かつての祖母の言葉は」に続く部分を、三十字以上四十字以内で答えなさい。

問八 ―線部8「狭っこいのは自分のほうだった」とありますが、文香がこのように思ったのはなぜですか。四十字以上六十字以内で説明しなさい。

問九 ―線部9「ばあちゃん……」とありますが、このときの文香の心境を説明したものとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 見舞いに家族が来なくなったことで気弱になった祖母から自分にあてた言葉を遺品として受け取り、祖母のさみしさに気付いたことで、自分のわがままを通そうとして祖母の気持ちに寄り添ってこなかった事実思い至り、申し訳なく思うと同時に自分も家族のために生きるべきだと反省している。

イ 入院して自分の時間を持てたことで余裕が生まれた祖母から自分にあてた言葉を遺品として受け取り、祖母の素直な気持ちを聞いたからこそ、今まで気付かないふりをしていた祖母の不器用な優しさを意識するようになり、反発していた自分を情けなく思いつつ感謝の思いでいっぱいになっている。

ウ ken1の指摘で視野の狭さに気付いた祖母から自分にあてた言葉を遺品として受け取り、祖母が文香に厳しく接していたことを後悔していたと知ったからこそ、仲直りする機会を持つともしなかった過去を思い出し、最後まで祖母を悪く言い続けていた罪悪感におしつぶされそうになっている。

エ ken1との交流を通じて考えを改めた祖母から自分にあてた言葉を遺品として受け取り、祖母の愛情に気付いたことで、今まで考えもしなかった祖母が置かれていた状況に目が向くようになり、反抗的だった態度を後悔するとともに、自分も自分の人生をひたむきに生きようと決意している。

オ オンラインゲームという手段で異なる価値観に触れた祖母から自分にあてた言葉を遺品として受け取り、祖母の本心を知ったことで、想像もしていなかった祖母の生きた時代に思いをはせるようになり、今の自分なら一つの価値観にとらわれずに生きていけるだろうと期待に胸をふくらませている。



A日程（1月10日）

解答用紙
(50分)

整理番号

氏名

ここにシールをはってください

[illegible]